

令和 8 年度第 1 回市川市地域ケア推進会議 会議録

1. 開催日時

令和 8 年 7 月 28 日（火） 午後 6 時 30 分～午後 8 時

2. 開催場所

市川市役所第 1 庁舎 5 階第 4 委員会（市川市八幡 1－1－1）

3. 出席者

【委員】

山下会長、秋本委員、小沢委員、鎌形委員、越田委員、中原委員、野口委員、服部委員、牧野委員、山本委員、横山委員（敬称略）（欠席者 3 名）

【市川市高齢者サポートセンター】

各高齢者サポートセンター（生活支援コーディネーター含む）から計 12 名

【市川市】

地域包括支援課 高橋課長 ほか

4. 傍聴者

1 人

5. 議事

（1）令和 7 年度地域ケア推進会議の振り返り

（2）独居高齢者の見守り支援の現状と課題

（3）グループワーク

（4）講話「独居高齢者の見守りに関するアプローチ」の視点と留意すべきこと

講師：会長 山下 興一郎 氏

（5）その他

6. 配布資料

- ・ 令和 8 年度 第 1 回市川市地域ケア推進会議 会議次第
- ・ 令和 8 年度 第 1 回市川市地域ケア推進会議 資料

7. 議事録

(午後6時30分開会)

発言者	発言内容
山下会長	ただいまより令和8年度第1回市川市地域ケア推進会議を開催いたします。 まず、今回新たに委員になられた、市川市介護支援専門員協議会中原様、市川市福祉公社野口様、市川市自治会連合協議会服部様より一言ご挨拶をお願いいたします。
中原委員	市川市介護支援専門員協議会の中原と申します。 普段はケアマネジャーとして、この地域の高齢者の方へ介護保険を使ったサービスのお手伝いをさせていただいております。 会議の方は初めてですので、まず見学させていただきながらいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。
野口委員	市川市福祉公社の野口と申します。よろしくお願い致します。 普段は介護保険のケアマネジャーと障がい者の相談支援専門員の、2つを担当しており、下は小学生から上は99歳まで担当しております。 今日はいろいろ勉強させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。
服部委員	市川市自治会連合協議会の服部と申します。北部地区社会福祉協議会の会長をしております。 初めての出席ですが、今後とも勉強して、地域のために理解していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。
山下会長	市川市の各団体の方が本日はお集まりになられまして、市川市の、主に高齢者の地域生活のケアについて考えて、各団体の取り組み等を協議していく、行政と連携していくといった会議の趣旨でございます。 では議題のうち令和7年度地域ケア推進会議の議題について、事務局さんお願いします。
事務局	議題（1）令和7年度地域ケア推進会議の振り返り （令和7年度地域ケア推進会議の振り返りについて、配布資料に基づき説明）
山下会長	では続きまして議題の2 独居高齢者の見守り支援の現状と課題にうつります。 説明をお願いします。

事務局	議題（２）独居高齢者の見守り支援の現状と課題 （配布資料に基づき説明）
山下会長	それでは議題の３番、少人数グループに分かれた協議に移ります。 社会福祉援助技術上では、ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークと３つあります。 ケースワークというのは、生活に困窮している方を中心にした、個別の相談活動のことです。グループワークというのは、例えばYMCA、子供の健全育成のためにグループで活動することですとか、自殺者の家族の方や、アルコール依存症の方、薬物依存の方等共通の人々が集まって、話をするということです。 ここで大事なのは共通の体験や共通の感覚を持っているということです。今日お集まりの皆様は市川市の様々な団体に属していて、市川市で保健医療福祉や地域活動などを展開されているという共通性の中で、２万人を超える、市川市のひとり暮らしの高齢者の方のグループワークをするという共通性かと思います。全国的な話でも千葉県の話でもなく、市川市の一人暮らしの高齢者という観点で、ぜひそれぞれのご出身の母体の知見を、積極的に意見交換してくださることに意味があるかと思います。 それでは、グループワークの進め方について説明をお願いします。
事務局	議題（３）グループワーク（意見交換） （進行、事例について説明後、１～３グループで意見交換）
山下会長	ありがとうございました。それでは、１グループから順番にご協議いただいた内容の発表をお願いします。
１グループ 発表者	１番の緩やかな見守りに関しては、地域で市民の方が自然に集まる場所というイメージがある喫茶店や、床屋等で、最近だれだれ見かけないよねという話をするのが、緩やかな見守りではないかという意見が出ました。他には個別に道を歩いているときに声をかけてみたり、近所の方の情報交換なども緩やかな見守りなのではないかという意見が出ました。 ２番の役割分担に関しては、先ほどお話をした喫茶店や床屋等と情報を連携し、私たちに繋げることができるようにするのはどうかという意見が出ております。
山下会長	ありがとうございました。それでは、２グループお願いします。
２グループ 発表者	２グループでは１番の緩やかな見守りについては、どの職種でも、自宅を訪問した時や、事業を行う中で、異変に気付けるような状況になってい

2 グループ 発表者	るという話が出ました。地域では隣の人同士で回覧版を使って、情報共有をしているというような緩やかな見守りをしているという話が出ました。 2 番の役割分担というところでは、気づいたことを、高齢者サポートセンターやケアマネジャー等のご家族等の情報を持っているところに、自然な流れでご相談していただいている方が多い、ということがわかりました。
山下会長	ありがとうございます。それでは、3 グループお願いします。
3 グループ 発表者	3 グループでは、雨戸が開いていないとか回覧板がこないというところで、町会や自治会、近所の方が一番変化に気づきやすいのではないかと、という意見が出ました。ケアマネジャーが訪問する際に、近所の方から声をかけられたりするの、近所の方が見ているからであり、やはり見守りの根底には地域の人たちの目が大事ではないか、という意見が出ました。 戸建てに関してはそれでいいかもしれないですが、マンションに関しては、そのような近所付き合いを好まないで入居されてきた方もいらっしゃると思うので、マンションでの実態把握はとても難しい現状があります。管理人さんが状況を把握している場合もあるので、管理人さんと繋がるのが大事ではないか、という話になりました。また、行徳では、管理規約で全員が自治会に入り、みんなで見守る体制が実際にできているところもあるという話も出ました。 他には、お子さんが働いている会社からの繋がりですとか、地域ケアなど、何かしらの社会的な繋がりがある場所から連絡が来たりすることが多いということも分かりました。 最後に、私たちのグループで話に出てきたのが、普段から見守りをするような方だけでなく、地域の中で「他の方の目を増やす」ということです。小中学生向けにも「認知症サポーター養成講座」を実施できるのですが、なかなかそういった取り組みが広がっていないという現状があります。そこで、市川市でも学校の授業のカリキュラムとして導入し、見守る目を増やし、育てていくという点において、こういった子ども向けの認知症サポーター養成講座がもう少し広がってもいいのではないかと、意見をいただきました。
山下会長	ありがとうございました。見守りという定義は様々な場面で使われているので、少し焦点を合わせるのが難しかったかと思います。 例えば、老人ホーム等の介護施設やグループホーム、リハビリの場、あるいは治療中の患者さんもそうかもしれませんが、そこでの見守りというのは、ご本人が自分でできるようになるのを見守るということです。こちらが一方的に何かをしてあげるのではなく、できるようになるのを見守

山下会長	る、ある程度時間をかけたり、その方がやりたいと思うことを助けたりする見守りです。 例えば、腰が曲がっていて電球を付け替えられないという方がいたとします。代わりに付け替えてあげる人がいるのはすごく良いことなのですが、もし自分でやりたいという本人の意思があれば、転んでしまうリスクに備えて、そばにいて見守ってあげるの方が大切だったりします。頼むところまではやっていないけれど、付け替えるときに転んだら心配だから寄り添う、というような形です。 最近、一人暮らしの高齢者の方の入浴を見守る支援がありますよね。確にお風呂場で転倒してしまうこともあるため、家族が見守っている場合もありますし、有料の介護保険サービスを利用されている場合もあります。お風呂に入りたい、湯船に浸かりたいけれど、以前にお風呂場で転んだ経験がある。そういう点での見守りが、高齢者介護等の見守りにおいて2000年以降、急速に注目され始めたのだと思います。 まだ老人ホームが、入浴・排泄・食事という3大介助を中心にやっていた頃、介護職員が「忙しいから待っていてね」と言って、高齢者の方をぼんやりと待たせてしまうような状況がありました。そうしたケアをやめて、自分で箸やスプーンを使ってご飯を食べられるようにし、「おいしいね」と共感しながら見守ることこそが介護職員の大事なケアであると、介護関連の見守りの重要性が言われ始めたのが2000年頃でした。 一方で、今日お話しいただいている在宅の見守りにはどういう歴史があるのかについて、地域福祉の実践研究の歴史から考えてみますと、見守りの前には集まる場が必要だという話になります。だからサロンなどがあるわけです。集まる場は、先ほどお話に出た喫茶店でも、床屋さんでも構いません。1970年代や80年代には、これが病院や診療所の受付の前でした。病院は9時から始まるけれど、7時半や8時くらいから待合室が開いていて、そこにみんなが集まっておしゃべりをし、お医者さんに診てもらって帰る。実はそんなに病気ではないけれど、お医者さん診てもらって、話をして帰るといった、そんなことも含めて、地域に集う場がありました。そうして関係性ができた人たちの間で、「あれ、あの人、最近来なくなったね」「最近ちょっと見かけないけれど、どうしたのかな」という気づきが生まれます。そこから「その人の家に行ってみよう」という見守り活動が始まっていきました。 実は、一人暮らしでご主人を亡くされていて、認知症とまではまだ診断されていない段階だけれど、人に迷惑をかけるのが嫌だから、という理由でサロンに来なくなってしまった、という方がいらっしゃいました。周りはサロンに来てほしいけれど、本人は「迷惑をかけたくない」と言って来なくなってしまいます。そこで、サロンのメンバーたちが「この方がこれからも地域で暮らせるように、見守りのネットワークを作りましょう」と提案
------	--

山下会長	して、地域の自治会や町会の一部で見守りネットワークが始まりました。これが全ての自治会や町会レベルでできていたら素晴らしいのですが、人間の繋がりや町会の関係性、お隣同士がすごく仲の良い地域もあれば、そうではない地域もありますので、全国展開されたわけではありませんが、市川市でも社会福祉協議会のどこかの地区で、歩ける範囲を対象とした小地域見守りネットワークが、1980年代くらいから急速に広がっていった時期があったかと思います。そうして、歩ける範囲での見守り活動が始まった先に、今度は身体的なほころびが生じてきます。 そこで次に行われたのが支え合い活動です。見守りが発展して家の中に入って、家事をお手伝いするというような活動が始まっていきました。これが、住民が助け合いながら地域を作っていった歴史です。こうした活動は、自然発生的にできる場合もありますが、そう簡単にはいかないことも多いため、社会福祉協議会の職員が意図的に仕組みを側面から提案し、自治会や町会の会長さんたちに「この地区にはこういう仕組みが大事なのだ」と説明しながら、参加してくれた方々と一緒に広げていきました。これが、この見守り活動の歴史であります。そして支え合いの先に、住民はどう動いたかということ、市の見守り支援や高齢者福祉について考えたり、意見したりするようになりました。つまり、主体としての住民がそこに登場してくるわけです。このような、住民だからこその福祉自治のようなものが、実は見守りの歴史の中にありました。 しかし、それが1990年代から2000年の入り口あたりで、少し陰りを見せ始めました。原因としては、地域の繋がりが薄くなったことと、介護保険制度が始まったことが挙げられます。制度を批判するわけではありませんが、外部サービスが整備されたことで、「ホームヘルパーさんが来てくれるから、この家には見守りは必要ないね」「デイサービスに行くようになったから、サロンは必要ないね」という話になっていきました。住民同士で助け合っていた活動が社会化され、専門職によるサービスに置き換わったわけです。サービス化されたこと自体は良いことなのですが、結果として、住民同士の助け合いという側面は薄れてしまいました。本当は、専門職によるサービスと住民の助け合いの両方が続いてくれれば良かったのですが、現実にはなかなかそうもいきません。 そして今日の地域ケア推進会議のように、住民同士でまた助け合いができないかという話を、国や市が進めたいと考えているところですが、孤人化、ひとりぼっち化が進んでいるため、本日は、各団体からお集まりいただいた方々に、それぞれの立場で緩やかな見守りについて何かご意見をいただけないでしょうか、というのが、グループワークのテーマであったのだらうと思います。 先ほどスクリーンに投影された見守りの方法において、緩やかな見守り・専門的な見守り・担当による見守りという類型が示されていました。
-------------	---

山下会長	これは東京都福祉局でも提唱していますし、様々な市町村が見守りガイドのようなものを作成しています。市川市でも作っているのでしょうか。作ってなくても良いと思います。あまり型にはめすぎるのも良くありません。スクリーンで示されたのは、住民同士がどういう風に見守っていくかという自治体の事例です。 緩やかな見守りというのは、先ほどから議論されているように、住民や地域に暮らす方々が人間関係を築き、温かい地域社会の中で見守るというイメージです。そうした人間関係がある地域であれば、市川市の中でも問題はありません。しかし現実には、無関心や繋がりが無くなっている地域もあります。自治会の加入率が低い地域や、マンションがオートロック、さらには二重ロックになっていて、隣に誰が住んでいるのか名前すら分からない、というようなマンションもあるかもしれません。本八幡あたりにもあるのでしょうか。ちなみに、私が住んでいる区内のマンションでも、隣に誰が住んでいるのか分かりませんし、挨拶をしてもすごく怪訝な顔をされますので、もう絶対に見守らないと心に決めています。人間関係が狭くて冷たい部分と温かい部分がある状況の中で、この緩やかな見守りに深く関わっていらっしゃるのは、ここにいるメンバーで言えば、高齢者クラブ連合会や自治会連合協議会の方々、そしてそれを推進する立場である社会福祉協議会の方くらいではないでしょうか。それ以外の方々は、どちらかというと担当による見守りや専門的見守りの領域に属していらっしゃる方々だと思います。グループワークでは、この緩やかな見守りについて、それぞれの立場から様々な意見が展開されたかと思います。 今日、私が申し上げたいと思ったのは、独居高齢者の見守りについてです。これは独居高齢者が自宅に一人である場面だけを見守れば良いのかということなのですが、もう少し視野を広げて、一人暮らしの方が家の中にいることだけに注目するのではなく、一人暮らしの高齢者が、住まい以外に居場所を持っているかという点に着目してはどうでしょうか。病院に通っている方もいれば、リハビリテーションに通っている方、シルバー人材センターに通っている方、また歳をとっても最後まで仕事を続けるという方もいらっしゃいます。やはり、そうした活動の場をいくつか増やしていくということをしていかないと、家の中だけで見守るという話だけでは、なかなか難しいのではないかと思います。場を増やすことで、そこに人が登場し、支えたり支えられたりという関係性が生まれます。皆さんが地元の各団体に戻られ、何かの会議でこの市川市地域ケア推進会議のご報告をされる際には、市川市としては、独居高齢者の緩やかな見守りに注目しているけれど、実はそれが進んでいる地域と進んでいない地域があるということをお伝えいただき、各団体として、一人暮らしの高齢者の支援において、それぞれの立場でできる何か具体的な役割が、少しずつでも見えてくると良いなと感じています。これが、今日お互いに示唆された宿題のよう
------	--

山下会長	なものだと思います。ただこのような場に関与していくとなると、皆さんの仕事を増やしてしまうことになりますので、あくまでできる限りのことだという話なのですが、例えば、医療機関の患者さんや、福祉サービスの利用者さん、あるいはシルバー人材センターの会員さんの中に一人暮らしの方がいたとき、どういう風に接していこうかという観点で少し考えてみていただければと思います。 これから一人暮らし激増時代なので、すぐに解決策が出てくるようなテーマではありません。だからこそ、先ほどファシリテーターの方は腕の見せ所だと言ったのですが、答えが見つかりにくい独居高齢者という問題はこれから確実に増えていきます。そうした意味で、各団体における一人暮らしの高齢者へのまなざしを言語化していく取り組みをしてみてもいいでしょうか。 そこで1つポイントになるのは、やはり一人暮らしの人にどうメッセージを出すかという、メッセージ性だと思います。周りが一生懸命見守るということをこの地域ケア推進会議で一致団結して関わることも、一人暮らしをされている方々にどうメッセージを出していくか、ということからスタートするのが良いのではないのでしょうか。SOSを投げる場所や、自宅以外にも居場所があることが大事だということを、私たちが何らかの場を通じて伝えていくことが大切です。シルバー人材センターに登録して活動されている方は、独居高齢者としての心配は少ないと言えます。病院に繋がっている方も、お医者さんという安心できる支援者に繋がっています。リハビリテーションに通っている方は、今の状態を維持したいという意欲があって主体的に関わっているため、外との繋がりを持っています。 最近、飲食店の方々と話していると、死ぬまで店をやるとおっしゃる方が随分たくさんいらっしゃいます。客を減らしてでも、営業日数を減らしてでも頑張る。もう客のためではなく、自分のためにやっているんだとおっしゃる方もいます。こうしたことも含めて、やはり一人暮らしという状態をネガティブにとらえたり、支援の対象としてとらえたりするのではなく、生活主体としてどう支えていくか、という入口の視点が重要だと思います。 一方で、体にほころびが出たり、家に閉じこもってしまったり、ゴミ屋敷化してしまったりして、専門的なケアがどうしても必要な場面もたくさん出てきます。現在では、一人暮らし高齢者を対象とした「見守りサービス」が商売としても登場しています。センサー型の機器や、家族向けのカメラ、GPS端末、ボタン1つで緊急通報できるシステムなどがあり、不動産業界でも一人暮らし高齢者向けの住宅展開と合わせてこうしたサービスを始めています。 もう1つは、先ほどもお話に出たヤクルトレディのような、配食や配達を兼ねた見守りです。これは従来から言われている方法ですので、引き続
------	--

山下会長	きこうした見守りのバリエーションは進化していくでしょう。 こうしたサービスで行われている見守りというのは、生活の安全確認や健康状態の把握、そして孤独死の防止です。 この会議の前に事務局へ市川市の自殺者数を教えてくださいと問い合わせをさせていただきました。なかなかデータでは出ないかと思いますが、私たちが本当に危惧しているのは、ご自身で死を選んでしまうことや、セルフネグレクトによって生きる気力を失ってしまう状態です。そのような状態に至ってしまった方に対しては、緩やかな見守りと言ってはいただけず、発見と気づきの仕組みが重要であり、そうした変化を察知するためには、各団体の方々の直感やセンスが大事になってきます。緩やかな見守りは、私たちでできることもありますし、市民の方々でもできますが、孤独死や自ら死を選んでしまうような状況にある方は、一人暮らしが増え、長寿化が進むにつれて、今後さらにその確率が高くなってしまおうと思います。 私は隣の埼玉県のある市の地域福祉計画の会長も務めており、先日3回目の会議がありました。そこでは、地域福祉計画と一緒に、罪を犯した人の再犯防止計画、成年後見制度の利用促進のための計画、そして自殺対策計画も盛り込んで、計画を作ることになっています。先日の会議では自殺対策がテーマだったのですが、その市では、前年度比で自殺者が増えてしまったそうです。県立大学の先生が研究してくださった結果を聞いたところ、女性の自殺が多く、高齢の方も多かったそうです。状況は毎年異なりますが、その時のデータによると、特に朝方に亡くなっているケースが多いとのことでした。子どもの自殺も増えており、子どもの場合は2学期の手前などと言われますが、高齢者の場合は朝方が多いという分析でした。つまり、見守ることや集まる場があること、少しでも人の声が聞けることなど、やらなければいけないことがまだまだたくさんありそうな気がしています。 今回は緩やかな見守り、専門的な見守り、担当による見守りという3つの類型を手がかりに議論してまいりましたが、独居高齢者の方々の世界は、いずれ私たち自身が迎える世界でもあります。私たちは、こうして会議に出たり様々な情報に触れたりしているので、「話せる相手を作ろう」「1日1回は笑おう」「ちゃんとご飯を食べて、しっかり寝よう」「全部自分一人で責任を背負い込むのはやめよう」などと、自分でいろいろと考えながら生きていますが、独居高齢者の中には、そうした話し相手すらおらず、ただ見守られて生きているだけでは厳しい状況の方もいらっしゃいます。そのことを考えると、見守りというのは、消極的な見守りであってはいらないのだと思います。積極的な見守りを展開するには、1人の方をただ見守る仕組みではなく、行政の施策としても、一人暮らし高齢者のためだけではないような場づくりや、話ができる環境、SOSを出せる仕組み
------	--

山下会長	が必要です。 例えば、公衆トイレや、大型スーパーのフードコート、薬局、診療所の入り口などに、SOSの連絡先カードが置いてあるような取り組みも考えられます。ひとりぼっちで寂しいとか誰も来てくれないといったことは、ご本人からはなかなか口に出せないものですが、そういう気持ちを言えるような時代にしていきながら、私たちは見守りという活動を忘れないようにしたいものです。 最近では、見守りという言葉よりもアウトリーチという言葉の方がよく使われています。緩やかな見守りを行う一方で、例えば社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカーや、生活支援コーディネーターの方々、あるいは認知症初期集中支援チームなど、地域を歩いている人として、地域にアウトリーチしている方がいます。地域を見るということは、そこに暮らす人間も見ているはずなので、そこで心配な方々が自然と目に入ってくるはずです。そうした気づきを、自治会・町会の方や民生委員さんなど、日頃から緩やかな見守りをしている方々と繋いでいく。これからは、専門的な見守りを行っている方が、その対象者に緩やかな見守りがちゃんと届いているか、を確認する。一人暮らしの対象者へのまなざしを、もう少し増やしていく。そういったことを自身の仕事のしていくのはどうでしょうか。 市川市には約3万人の一人暮らし高齢者の方がいらっしゃいますので、生活のスタイルは様々かと思います。すべての一人暮らし高齢者を見守ることは難しいので、私たちが繋がった人たちをきっかけに、ご本人の力で居場所を作ってもらい、人を増やしながら、これからの一人暮らし社会を支える基盤をみんなで作っていく。今日の会議は、そういう機運を高める場所にしたいという事務局の意図があったのではないかと思います。 最後になりますが、災害時の話をすると、住民の方々もより身近な課題として捉えやすくなります。避難行動要支援者名簿の作成は、行政に義務付けられていますが、本人の同意がないと名簿に登録できません。本人が拒否された場合は、名簿に載らないわけです。そのため、65歳以上の独居高齢者のうち、避難行動要支援者名簿に登録されている人がどれくらいいるのか、そして登録されていない人のうち、リスクを抱えているのはどういう人なのか、というところまで深く掘り下げて話していかないと、一人暮らしの見守りという問題と災害時にどう助けるかという話が結びつきません。 行政には努力義務として、避難行動要支援者名簿をもとにした個別避難計画の作成が求められています。これをケアマネジャーさんや、障害福祉の相談支援事業所の方々と一緒に作っていくよう国からは例示されていますが、実際に自治体で取り組むかどうかは、それぞれのケアマネジャーさんや、相談員の方々の意見もありますので、進んでいる地域とそうでない
------	---

山下会長	地域があります。東日本大震災の被災地の自治体でも、まだ作成が進んでいないところもあるほど、難しい課題です。 しかし、先日の熊本での地震や、大雨災害などを見ても、被災した際に一番困るのは、一人暮らしの高齢者や障害者の方々です。こうした災害時の課題とも関連付けながら、私たちは緩やかな見守りを前提として大切にしつつ、専門職による見守り活動を、地域の中でしっかりと展開していけるよう結びつけていく必要があります。最終的には、自殺防止なども含め、一人暮らしの方々が抱える多様な背景に寄り添った市川市の一人暮らし支援システムが、地域経営の中で必要だと思います。 私からの話は以上です。皆さんのご意見やご感想はいかがでしょう。
高齡者サポ ートセンタ ー 佐藤氏	昔は病院も開放されていて、半日や1日中過ごされているお年寄りの方もいらっしゃいました。銀行にもロビーにちょっとした開放スペースがあって、ガヤガヤと賑やかな中で、椅子に座ってポツンと嬉しそうに周りを見ているお年寄りをよく見かけた気がします。 しかし今では、病院は予約制になっていますし、銀行もATM中心の小規模な店舗が増えて、昔のような広いロビーや出入り口がなくなってしまいました。そのため、お年寄りの方が用事がなくてもふらっと行ける場所を失ってしまっている、と感じています。受け入れ側の病院や銀行からすれば、用事のない方がいつまでも居座るのも問題があるとは思いますが、お年寄りにとっては、何かをするわけではないけれど、そこに行けば人がいてガヤガヤと賑わっている場所が大事なのではないのでしょうか。ただ、そういった場所を今の地域の中で作れるかというと、難しいと思います。 私の活動している行徳地域でも、サロンはありますが規模が小さめで、自治会は開放されているわけではありません。こうした部分で、生活支援コーディネーターが、どのように誰でも出入り自由なオープンな場所づくりをしていくか、という課題になるのだと思います。これはやはり、地域の方々の協力がないと難しいと感じています。サロンに行ったら何かしないといけないというプレッシャーを感じるお年寄りもいらっしゃいますので、何もしなくていい場所を作るというのも、大切なのかなと感じています。
山下会長	貴重なご意見をありがとうございます。 今の病院や銀行は、地域の居場所ではなくなってしまった、ということなのでしょう。 今は、大型スーパーのフードコートなどが、お年寄りの居場所になっていますよね。住民の方は、そうやって自ら居場所を探す力も持っています。ただ、それだけでは場所が足りないですし、一人暮らしの高齢者は増え続けています。

山下会長	最近の事例として、東京都新宿区の地域包括支援センターでは、地域の銭湯であまりお客さんが集まらない時間帯を活用して、お年寄りの集まる場を作る取り組みを行っています。実は新宿区では、自宅にお風呂がなく、銭湯が必要な方が多くいらっしゃるそうです。もしかしたら市川市よりもお風呂がない家が多いのかもしれませんが、しかし、一般的な住宅にはお風呂があるため、銭湯の経営は難しくなっています。そうした状況の中でも、銭湯という場所を地域交流の場として着目されています。 あとは、皆さんもご存知の食堂です。食べるものがある場所、あるいはお風呂に入れる場所のような、何もしないというよりは、そうした日常の営みがある場所にふらっと集まる方が多いようです。でも、確かにおっしゃる通り何もしなくても出入り自由な場所があると良いと思います。 もう1つ注目されているのがスナックです。昼スナックや朝スナック（昼スナ・朝スナ）と言って、お酒は出さないのですが、日中に人が集まっているそうです。 別の自治体の会議で聞いたのですが、最近は女性の間で健康麻雀が流行っているそうです。男性よりも女性の参加者が多いとのことでした。男性は「昔のようにチップを賭けたりできないから面白くない」と言って敬遠されることもあるそうですが、タバコを吸わず、お金も賭けない健全な「健康麻雀」が、女性たちの間で大人気だそうです。 このように、自分たちが元気になれることを自主的に見つけて活動しているので、そこに周りから一方的に見守る体制を作るのはナンセンスです。自然に集まれる場所をみんなで作っていたり、一人暮らしの方が自分で新しい居場所を開拓したりしているところに着目してはどうでしょうか。あるいはそうした高齢者と交流したいという思いでスナックを開いている人たちを、行政の施策として後押しする。こうした場を作るということを、高齢者福祉計画などの行政計画にどのように盛り込んでいくかが、大事になります。 先ほどご意見いただいた、あそこに行けば出入り自由で、何をしてもいいし、何もしなくてもいいという場所は、非常に大切だと思います。何かの役に立つから作るのではなく、何もしなくていい場所が大切です。家以外の場所に行くことが人生である、という感じでしょうか。 素晴らしいご意見をいただき、ありがとうございました。
地域包括支援課長	皆様貴重な、なかなか聞けないお話をしていただきましてありがとうございました。 緩やかな地域の中に、それぞれの居場所をどう作っていくのかということが大きなテーマになると思います。高齢者の方はやはり自分らしい生活を送れる場所が自宅以外にもあるというのは、地域で見守るために必要なことの1つだと思います。色々な方がいらっしゃるのとは当然なので、これ

地域包括支援 課長	がいいという答えはなかなかないと思います。様々な発想を持って、様々な方が協力できるような、評価を受けられるような居場所づくりを皆様のご協力いただきながら、進めていきたいと思っています。 本日はありがとうございました。
山下会長	それではこれをもちまして、令和８年度第１回市川市地域ケア推進会議を終了いたします。
事務局	本日は皆様ありがとうございました。

(午後８時閉会)